

(天正三年) 五月二十二日 織田信長黒印状写

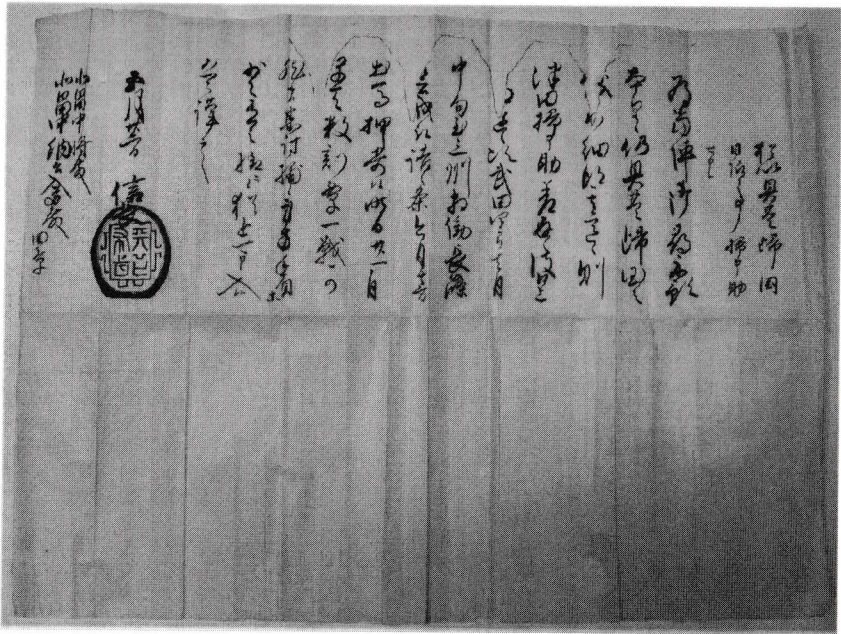
河内将芳

本史料は、奈良大学文学部史学科が京都の古書肆より購入し、所蔵する古文書である。紙数は一通。折紙。法量は三六・三糶×四八・九糶。包紙をとめない、上書には「信長公多気国司^江御書写」と記されている。
原本ではなく、影写本の類となるが、これまで知られてこなかった内容を含む。よって、今後の研究に資するものと考え、今回紹介することにした。

〔釈文〕

猶以具豊帰国^(北畠)

日限之事、掃部助^(津田)
可申候、
為当陣御尋示預
本望候、仍具豊帰国之^(北畠)
儀、^(委力)細得其意候、則
津田掃部差返候、彼口上
□□候、次武田四郎去月
中旬至三州相働、長篠
□□被詰之条、今月十三日
出馬押寄候、昨日廿一日
早天数刻軍一戦、可



然者悉討捕候、身方手負等
少々有之様^二候、猶追可申入候、
恐々謹言、
五月廿二日^(天正三年) 信長^(織田)
北畠中将殿^(真徳)
北畠中納言入道殿^(真徳)
回章

みてのとおり年紀は記されていないが、「長篠」の文字がみえ、いわゆる長篠合戦直後の情報が記されている。そこから、本史料の原本は、天正三年(一五七五)に発給されたものと考えられる。

長篠合戦がおこなわれたのは、天正三年五月二十一日のことだが、それは、「昨日廿一日早天数刻軍一戦」と本史料にもみえることからあきらかとなる。よって、本史料は、長篠合戦の翌日にしたためられたものとなる。

長篠合戦は、織田信長・徳川家康と武田勝頼とのあいだで三河国設楽原をおもな戦場としてくりひろげられた戦いである。

そのきっかけは、「武田四郎去月中旬至三州相働」と本

史料にみえるように、「武田四郎」が「三州」へ軍事的活動を活発化させたことにある。

「去月中旬」が具体的に何日をあらわすのかまではわからないが、おそらく卯月二十一日には、「東国之人数至三州相働」いたことが確認できる。したがって、それ以前であったことだけは確実とせらる。

このような武田勢の動きに対応して、信長が居城のある岐阜を出発したのは、本史料に「今月十三日出馬」とみえるように五月十三日のことになる。

このことは、「長岡兵部太輔」に宛てた五月十五日付信長黒印状にも「十三日出馬候て、昨日十四至岡崎着陣候」とあることから裏づけられる。そして、「廿一日」にいたって、「早天」より「数刻一戦」に「覃」んだのが長篠合戦にほかならなかった。

本史料では、「可然者悉討捕候」とみえるが、同時代史料である『兼見卿記』同年五月二十一日条では、「数千騎討死」、また、『多聞院日記』同年五月二十七日条では、「千余討死」と伝えられている。

討死者の実数にはばらつきがあるものの、武田勢に大きな損害をあたえたことだけはまちがいないであろう。

みえ、長篠合戦後しばらくして、「御茶セン」が「伊勢国司家」の家督を「譲」られ、「入国」したことが知られる。これらのことから推せば、それにむけての「帰国」であったのかもしれない。

以上の点から、本史料は、南伊勢支配と長篠合戦という信長にとって重要な局面を伝える内容を含んだものといえる。もともと、本史料は原本ではなく、その意味では慎重さが必要とされることはもちろんである。

ただ、差出にみえる「馬蹄形の二重線で「天下布武」の印文を囲った」黒印は、前日の五月二十日に「長岡兵部太輔」に宛てて出された信長黒印状と同じすがたとなっている。本史料の歴史的な価値をはかるうえでも貴重な材料となるであろう。

注

- (1) 『兼見卿記』(史料纂集 天正三年五月二十一日条ほか。
(2) (天正三年) 卯月二十一日付六角義堯書状(『本善寺文書』、愛知県史 資料編11 織豊1) (以下、『織豊1』、愛知県、二〇〇三年) 一〇八四号。
(3) 金子拓「織田信長にとつての長篠合戦」、鴨川達夫「長篠の

ところで、宛所にみえる「北畠中納言入道」と「北畠中将」とは、伊勢国司家の北畠具教とその子具房を指している。⁸⁾そして、編纂物ながら、『信長記』(『信長公記』) 卷二によれば、さかのぼること永禄十二年(一五六九)にその北畠家とのあいだに「信長公之二男お茶筌へ家を譲り申さる、御堅約」がむすばれたという。

本史料にみえる「具豊」とは、その「お茶筌」(のち織田信雄)の諱(実名)である。また、「津田掃部」とは、『信長記』卷二に「御茶筌公大河内城主として津田掃部相添え置き申され」とあるように、「具豊」を補佐する役目になった津田一安を意味している。

本史料では、尚々書を含めくりかえし「具豊」の「帰国」のことが話題となっているが、『信長記』卷七によれば、前年天正二年(一五七四)七月十五日の長島一向一揆に対する攻撃に「お茶筌公、捶水・鳥尾野尾・大東・小作・田丸・坂な井是等を武者大将として被召列、大船に取乗参陣也」とあり、「具豊」が伊勢衆を率いて、信長勢の一部として戦場にいたことがわかる。

ところが、『多聞院日記』天正三年六月二十四日条には、「伊勢国司家ヲ御茶センニ廿三日ニ譲り、則入国と申了」と

戦いと武田勝頼(金子拓編『長篠合戦の史料学—いくさの記憶—』勉誠出版、二〇一八年)。

- (4) (天正三年) 五月十五日付織田信長黒印状(熊本大学文学部附属永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 中世編』吉川弘文館、二〇一〇年)。

(5) 史料纂集。

(6) 増補続史料大成。

- (7) 木下聡「長篠合戦における戦死者の推移について」(前掲『長篠合戦の史料学—いくさの記憶—』)。

(8) 谷口克広『織田信長家臣人名辞典 第2版』(吉川弘文館、二〇一〇年)。

(9) 岡山大学池田家文庫等刊行会編『信長記』(福武書店、一九七五年)。

(10) 『平成十二年度秋季特別展 信長文書の世界』(滋賀県立安土城考古博物館、二〇〇〇年)。

(11) (天正三年) 五月二十日付織田信長黒印状(前掲『永青文庫叢書 細川家文書 中世編』)。

(付記)

本史料紹介については、二〇一八年度日本史講読Iにおいて学生諸君と読解した成果を含んでいる。学生諸君に謝意を表したい。